

特別なニーズのある子ども達への ICT の利活用

～音声ペン、タブレットペンシルによる実践を通して～

企画者	是枝 喜代治 石飛 了一 生田 茂	(東洋大学福祉社会デザイン学部) (筑波大学附属大塚特別支援学校) (大妻女子大学人間生活文化研究所)
司会者	是枝 喜代治 石飛 了一	(東洋大学福祉社会デザイン学部) (筑波大学附属大塚特別支援学校)
話題提供者	川端 康治 藤田 貴史 柘植 美文 岡本 明博	(埼玉県立川島ひばりが丘特別支援学校) (神奈川県立高津支援学校) (国立特別支援教育総合研究所) (十文字学園女子大学教育人文学部)
指定討論者	根本 文雄 菅野 和恵	(障害児基礎教育研究会) (東海大学健康学部)

KEY WORDS: 手作り教材, 音声ペン, ICT の利活用,

【企画趣旨】

GIGA スクール構想の実現に向けて、特別なニーズのある子ども達に対する ICT 機器を用いた実践が各所で広がりを見せている。本企画では、これまで特別支援学校等における手作り教材の制作や教育実践を通して、多様な障害のある児童生徒達に対する ICT の利活用について、様々な関係者の話題提供を基に議論を重ねてきた。今回は、視覚障害や知的障害などの多様なニーズを持つ子どもの支援に関して、音声ペンやタブレットペンシルなどを使用した実践について話題提供をいただき、さらなる議論を深めていきたい。

【話題提供者の趣旨】

1) 墨字・点字が使用できない全盲の生徒への音声ペンを活用した支援 (川島ひばりが丘特別支援学校 川端 康治)

前任校の盲学校の言語環境は墨字や点字が中心であるが、中には墨字・点字の両方とも使用できない児童生徒も存在する。そのような児童生徒に対して IC レコーダー等を使って情報を聴く方法もあるが、墨字・点字と並ぶような存在とはなっていない。今回、彼らに対する情報保証の一環として音声ペンを使用した取り組みを行った。対象は高等部普通科重複学級に在籍する生徒 A である。全盲ではあるが挨拶などの日常会話は可能である。しおり作りでは、生徒 A 自身が音声ペンを自主的に使ってしおりから情報を得ることはなかったが、教師と一緒に作成することで、行事活動に見通しを持って取り組むことができた。また、作文の作成では、次第に自分の意見や思いをまとめて言えるようになり、音声ペンを使って「わかりやすかった。」と答えていた。

2) 知的障害のある中学2年生の音声ペンを活用したコミュニケーション支援 (神奈川県立高津支援学校 藤田 貴史)

知的障害のある中学部2年生の生徒 B に対して音声ペンを使用した実践を行った。生徒 B は、発語はないが、日常場面の教師の指示や挨拶に応じた行動はできる生徒である。また、こだわりが強く新しい場所や教材には抵抗感を示すが、音絵本やプリント課題などが好きであった。そのため、生徒 B の特性に応じた自作教材や音声ペンの使い方を調整し、導入における音声ペンへの抵抗感を減らした上で、学校での活用や居住地交流 (生徒の居住地の中学校と交流し、共に学習する、交流及び共同学習) を通じて、本人の役割や他の生徒とコミュニケーションを行う場面を設定することができた。さらに、校内での実践報告や保護者の音声ペンの購入により、生徒 B に対する音声ペンの継続的な利活用に繋げることができた。

3) 知的障害のある生徒のタブレットペンシルを用いた書記表現に関する研究実践 (国立特別支援教育総合研究所 柘植 美文・十文字学園女子大学教育人文学部 岡本 明博)

知的障害特別支援学校高等部の生徒 C に対し、タブレットと専用ペンシルを用いて作文課題を試みた。生徒 C は複数の文字入力の方法からキーボードのかな入力を選択し、体験や気持ちを想起するために実施した状況絵を用いたやり取りの後、15分ほどで作文を完成させた。作文には、事前のやり取りで語られなかった内容が書かれており、文章を考える中で思い出したことを付け加えたり、内容を整理しながら書いたりしたと考えられた。タブレット使用の利点について、生徒 C は、すぐ消せる、紙が破れる心配がない、字が下手なことを気にしなくてよいなどと話していた。本実践から、書記表現活動にタブレット等を用いることについて、微細運動の苦手さや認知面の補助手段として有効であり、補助があることで文章の構成を考えることに注力できたことが示唆された。

【指定討論者の趣旨】

(障害児基礎教育研究会 根本 文雄)

障害児基礎教育研究会は、1989年に水口浚によって創設された研究会である。その特徴の一つは、発達の初期段階の運動操作から概念形成 (言葉や数) 操作活動に至るまで、教材教具を用いた実践に基づいて実証的に解明しようとしていることである。この観点から、音声ペンをはじめとする ICT ツールの活用について必要な学び、配慮する点を検討したい。

(東海大学健康学部 菅野 和恵)

デジタルインクルージョンの観点から、知的障害のある児童生徒のテクノロジー利用を促進するための実践について検討したい。ICT を利用することが知的障害のある人にもたらす潜在的な利益について考察するとともに、利活用を促進する可能性が高い実践の構成要素を抽出したいと考えている。

付記：本研究の倫理的配慮に関しては、日本特殊教育学会の倫理綱領・倫理規定に基づき、事前に所属長・本人・保護者に説明し、了承を得た上で掲載しています。また、各自治体の個人情報保護条例に抵触しないことを確認しました。なお、本論文に関して開示すべき利益相反関連事項はありません。

(KOREEDA Kiyoji, ISHITOBI Ryoichi, IKUTA Shigeru, KAWABATA Kouji, FUJITA Takashi, TSUGE Mifumi, OKAMOTO Akihiro, NEMOTO Fimio, KANNO Kazue)